

原爆体験の〈表現〉と〈運動〉を問うこと

川口隆行

二〇世紀半ばに登場した核・原爆は、人間、社会、自然のありかたを大きく変え、それ自体のあるいは関連する様々な表象を生み出した。核・原爆の表象は、すべての表象がそうであるように、生産や受容の形態を含む社会的文化的関係性において表出される。

たとえば、国民国家はそうした表象システムを通して国民意識を喚起してきた。国民国家を含め「共感の共同体」は、「実際には生きてはいないが、それを生きている」「同時性」の感覚を担保する体系化した「歴史的語り」|| 共同的表象体系を必要とする(酒井直樹『日本思想という問題 翻訳と主体』岩波書店、一九九七年)。原爆体験もそれが広範に社会化されることによって、「戦後」意識の一端をつくりあげてきたのであり、「原爆文学」もそれと無縁にあつたわけではない。

拙稿「原爆文学」という問題領域——「夏の花」「黒い雨」の正典化、あるいは『原爆文学史』(『プロブレマティック文学/教育』2、二〇〇一年。のち『原爆文学という問題領域』創言社、二〇

〇八年所収)において、60年代後半から70年代前半における、「黒い雨」の正典化、それにとまなう「原爆文学」のジャンル化を問題にしたことがある。

この論考については、『黒い雨』再読を企図した特集で言及されるだろうが、そこで明らかにしようとしたことを私なりに言えば、被害と加害の交錯、体験の共有化といった問題と運動した、典型的な原爆物語の生成と受容、それへの批評的な言説実践の軌跡であった。「原爆文学」というジャンルを、固定化されたものと見なすのではなく、複雑な社会的文化的関係性、錯綜した声のせめぎ合いが継続される記憶と生存の場としてとらえ返そうとしたと言つてもよい。

本特集「原爆体験の〈表現〉と〈運動〉——60・70年代を中心に」は、個人的にはこうした問題意識を引き継ぎつつ、議論を次のステージに引き上げたいという大きな狙いがある。その点から言つても、本特集は、『黒い雨』再読を目的とした特集と車の両

輪の関係にある。

企画にあたってまず注目したのは、極めて単純な二つの事実であった。ひとつは、60年代半ばから70年代前半にかけて、原爆体験に関わる小説、詩、評論、ルポルタージュ、証言集、あるいは文学的発言などが多岐にわたって登場したこと。もうひとつは、やはりこの時期、既存の党派や組織に頼らない様々な社会運動や市民運動、文化運動が新たに生まれ、展開したこと。原爆体験の〈表現〉と〈運動〉の相関関係を前景化することによって、作品が生み出され、批評され、位置づけられる葛藤の現場を、よりいっそう具体的に把握することができないだろうか。

※

この時期に刊行された原爆関連の著作を思いつくまま列挙しておこう。大江健三郎『ヒロシマ・ノート』（一九六五年）、広島市原爆体験期刊行会編『原爆体験記』（一九六五年）、山代巴編『この世界の片隅で』（一九六五年）、井伏鱒二『黒い雨』（一九六六年）、秋月辰一郎『長崎原爆記』（一九六六年）、福田須磨子『われなお生きてあり』（一九六八年）中国新聞社編『証言は消えない 広島』の記録1』（一九六六年）、同『炎の日から20年 広島』の記録2』（一九六六年）、同『ヒロシマ・25年 広島』の記録3』（一九七一年）、栗原貞子『どきめんとヒロシマ24年——現代の救済』（一九七〇年）、平岡敬『偏見と差別——ヒロシマそして被爆朝鮮人』（一九七二年）、長岡弘芳『原爆文学史』（一九七三年）といったように、今日の観点から見ても重要な著作が集中していることは一目

瞭然であろう。小説を見渡しても、『黒い雨』に前後するように、竹西寛子「儀式」（一九六三年）、井上光晴「地の群れ」（一九六三年）、後藤みな子「刻を曳く」（一九七一年）、佐田稲子「樹影」（一九七〇〜七二年）、林京子「祭りの場」（一九七五年）といった、現在まで読み継がれる作品が輩出している。また、中沢啓治が、自身初の原爆マンガ「黒い雨にうたれて」を発表したのは一九六八年、「はだしのゲン」の連載をスタートしたのは一九七三年のことである。

「広島で原爆を受けたその日以来」「アメリカ人をひとり残らず殺してしまいたい、という暗い情念にとらわれつづけてきた。」「末期の思想を中核としてもたない平和運動は、もはやいかなる意味においても存在理由をもちえない」（私は殺したい）一九六八年）。良く知られた上野英信の言葉であるが、ここに被爆者の無念だけを読むのは浅薄であって、「殺意のやいば」が、旧植民地や在日の人々によって自分に向けるそれであることにも、当然ながら上野は気づいていた。被害と加害の交錯という問題は、封印したラーゲリの記憶に対峙し、「人間」はつねに加害者のなかから生まれる」（ベシミストの勇氣について）一九七〇年」と述べた石原吉郎にも通じよう。石原は、「広島を「数において」告発する人びとが、広島を投下した人とまさに同罪である」（「アイヒマンの告発」一九七二年）と断じたが、「告発」という言葉が位置する当時の文脈から判断して、社会運動の在り方に対する彼なりの違和の表明でもあった。あるいは、「おのれの傷口を誇りにする『ヒロシマ平和運動』」と「東京オリンピックに象徴される工業力誇示」では「民族的憤激は解決」されず、それを「正当に表

現した文字は終戦の詔勅にしかなく、原爆を「良心の呵責なしに作りうるのは唯一の被爆国・日本以外にない」（私の中のヒロシマ）一九六七年）などと、日本の植民地主義の問題を避けることで「ヒロシマ」から核武装の夢を紡ごうとした三島由紀夫のような文学者もいた。

見過ごせないのは、こうした〈表現〉の多くが、〈運動〉の渦中や周辺から生まれ、受けとめられていったということである。

〈運動〉への様々な反発や違和を含んだ〈表現〉さえも、見方を変えればその距離感こそが、〈表現〉の内実や読まれ方がある程度方向づけたとも言えよう。原水禁運動分裂を背景に、『ヒロシマ・ノート』は新たな生き方を模索する人々に広く読まれ、ベトナム反戦運動の高まりを強く意識して『黒い雨』は執筆された。小田実は、原水禁運動を抱えこんだ被爆ナシヨナリズムを乗り越える思想を、ベ平連運動を通して発見、鍛えていった。やはりベ平連に参加した長岡弘芳は、「原爆文学史」を構想、読書サークル「原爆文献を読む会」を立ち上げた。栗原貞子もベ平連の活動を通して、自己の原爆体験を問い直し、侵略の記憶を「ヒロシマ」というとき（一九七二年）に刻み込んだ。サークル村の運動から出発、水俣病患者支援に携わりながら『苦海浄土』（一九六九年）を発表した石牟礼道子は、長崎で被爆した朝鮮人の聞き書き「菊とナガサキ」（一九六八年）をまとめ、そのモチーフは丸木位理・俊夫妻によって『原爆の囀』第一二部「からす」（一九七三年）へと受け継がれていく。こうした〈表現〉による原爆体験の再発見、新たな意味づけは、被爆者救済運動の不十分だがひとつの成果として制定された「原子爆弾被爆者に対する特別措置」（一九六八

年）、70年代前半から本格的に展開される在韓被爆者支援、裁判闘争といった社会的動向と切り離されてはありえなかった。

栗原貞子の詩集『私は広島を証言する』（一九六七年）のタイトルが典型的に示すように、この時期、証言集やルポルタージュはもとより小説や詩といったフィクション・文芸作品も、自律した価値を有するものとして享受されるだけでなく、広義の「証言」としての役割を社会的に担った。一九七〇年前後を「証言」の時代と名付けたのは成田龍一であるが（『戦争経験』の戦後史——語られた体験／証言／記憶』岩波書店、二〇一〇年）、アジア太平洋戦争を直接知らない世代の登場によって、戦争体験の継承が社会的な課題とされ、直接的には様々な〈運動〉とともに記録証言集を輩出した。『黒い雨』や『ヒロシマ・ノート』など、被爆体験を持たない書き手の小説やルポルタージュがベストセラーになったのも、戦争や原爆体験の歴史化の動きと関わっている。さらに体験の歴史化は、体験の思想化という問題とも関係する。近年の東村岳史の論考は、長崎の証言運動におけるそれを論じて示唆に富む（『生活記録』から「証言」へ——「長崎の証言の会」創設期と鎌田定夫）『原爆文学研究』11号、二〇一二年、「もうひとつの『長崎の証言』とその後——写真による被爆者の表象小史』同12号、二〇一三年）。ついでにいえば、長崎の証言運動には、多かれ少なかれ、原子力空母エンタープライズ佐世保入港阻止闘争（一九六八年）が影響している。ベトナム戦争の前線基地としての佐世保の問題は、「ナガサキ」の歴史の再発見のありようとも深く結びついていた。またさらにいえば、『長崎の証言』編集委員であった山田かんは、「ひとつの『証言』として」長崎現代詩の系譜をた

どる連載を詩誌『炮帳』に開始（一九七一年）、のちにそれは『長崎・詩と詩人たち——反原爆表現の系譜』（一九八四年）に結実する。

ジャンルについて、別角度から言えば、たとえば、井伏が「ルポルターージュ」として『黒い雨』を執筆したと発言するように（本誌掲載の中谷いずみ『黒い雨』とベトナム戦争」参照）、小説／ルポルターージュ、あるいはフィクション／ノンフィクションといった区分は、書き手や読み手にとつて、必ずしも自明のものとして固定的に埋め込まれていたわけではなかった（先に名前を挙げた『苦海浄土』は、私小説か聞き書きか、という対立図式のいずれの項に位置づけられるかで、評価の仕方を大きく左右された。『黒い雨』はそうした境界の力学を通して「原爆文学」の正典になるのだが、長岡弘芳は『黒い雨』の価値を認めつつも、「一人の文学的天才よりは、多くの人間的誠実さの継続する多様な個性的営為こそが、原爆文学にあつてはとりわけ重要なのだ」（『原爆文学史』、一九七三年）と述べ、「数多くの日記や記録、手記の類いと分ち難く結びついて書き継がれてきた」（『原爆民衆史』、一九七七年）ものとして「原爆文学史」を構想する。長岡については少し論じたこともあるが、今後さらなる議論が俟たれよう。大きく言っておけば、彼の試みは、文壇中心の戦後日本文学史の空白を埋める試みである以上に、高度経済成長期において「文学」ならざるものとみなされつつあった（表現）の数々に、「文学」を探りあてようとした（運動）ではなかったか。「文学」と「文獻」の定義の狭間で、あるいは（表現）そのものと（表現）主体としての「民衆」への関心の間で揺れ動いた長岡の軌跡に、断念や挫折も含めて「文学」

の再定義の可能性を想像するのだが、先に触れた山田かんとも比較しつつ、改めて稿を用意したい。

誤解の無いように改めて強調しておくが、（表現）された「テキスト」の意味を、（運動）という「コンテキスト」に還元しようというのではない。被爆者救済運動、在韓被爆者支援、ベトナム反戦運動、証言・継承運動、あるいは読書サークルの組織化といった様々な（運動）と結びつき、時には背離もする（表現）は、既存の制度や法が不可視化してきた領域を切り開き、あるいは新たに別の死角を生み出し、体験の継承あるいは思想化といった問題とも不可分であった。（運動）としての（表現）、（表現）としての（運動）とも呼ぶべき、（表現）と（運動）の内実を深く理解するためにこそ、両者のあいだをうごめく出来事の把握が不可欠ではないかということなのだ。希望的観測をひとつ述べるとすれば、こうした試みは、核・原爆を対象としながらこれまで十分に交わることがなかった研究領域——言説分析・表象分析を得意とする文学・文化研究と被爆者救済援護運動などと結びつき展開した経験社会学的研究——を架橋し、対話の契機をつくりだすかもしれない。

※※

本特集は、ワークショップ報告をもとにした三つの論考を収めている。キアラ・コマストリ「被爆体験を（書く）——山代巴と『原爆に生きて』『この世界の片隅で』を中心に——」、小沢節子



「原爆文献を読む会」—— 会報にみる活動の紹介と再定置の試み」、道場親信「「核」の連鎖・「難死」の連鎖—小田実『HIROSHIMA』を読む」である。詳しくはそれぞれの論考を読んでもらいたい。以下、内容を簡単に紹介しながら、少し感想めいたものを自由に記しておきたい。



報告
キアラ・コマストリ

コマストリ氏は、山代巴を中心に編集された手記集『原爆に生きて』（一九五三年）とルポルタージュ『この世界の片隅で』（一九六五年）を取り上げ、同時期の他の手記集やルポルタージュとも比較しつつ、二つのテキストの連続性と差異、継承と転回の軌跡を立体的に描き出した。声を発することが困難な当事者から言葉を引き出し、彼らの組織化を進めたのが『原爆に生きて』であり、被爆者運動が組織化される中で、なお声をあげられない人々の姿（原爆孤児や胎内小頭症児、沖繩の被爆者、相生通りの在日朝鮮人、福島町の被差別部落民など）をルポルタージュという手法でとらえようとしたのが『この世界の片隅で』であると、それぞれのテキストの意義を位置づけた。

コマストリ氏の議論を踏まえて『この世界の片隅で』について言えば、それは書くことを通して、60年代半ばの「私たち」を問い直し、新しい公共圏を創り出そうとした試みであったと理解してよいだろう。ただ、声なき存在を書くといった場合、ガヤトリ・C・スピヴァックのいう「サバルタン」の問題、いわゆる表象Ⅱ

代弁の問題に引き合わざるをえない。そこには、「彼ら」を書こうとする「私たち」自身をいかに表象し再現するのかという課題が存在するはずだ。

（表現）による公共性の探索とでもいうべき（運動）。こうした点からもさらなる議論が期待されるが、それには、声なき存在を表象したとされるテキストの発語行為としての機能を考える必要があるかもしれない。それとおそらく関連するのが、テキストの具体的な読まれ方であろう。コマストリ氏は、『ヒロシマ・ノート』と比較して『この世界の片隅で』は、「発刊当時はともかく、その後急速に忘れられていったように思われる」と述べる。「多く売れた」「広く読まれた」という意味であれば、それは決して間違いではない。一方で、時代のモードのように消費される以上に「繰り返し読み深められる」テキストであったことを、実際の受容の場に即して指摘したのが小沢節子氏である。



報告 小沢 節子

小沢氏は、「原爆文献を読む会」の成立事情や活動実態、その後の展開について、関係者への聞き取り調査を踏まえ、会報を含めた関係資料の解説による再定置を試みた。従来の研究は、あながち間違いとは言えないにせよ、急進的な政治主義を主張する若者と文献重視の年長者の対立といった共同調査の中間総括とでもいうべき内容だが、部分的な言説に依拠した従来の議論が捉え損なった会の複雑な動きを可視化しよ

うとする。長岡弘芳と並んで中心的役割を担った中島竜美の存在、被爆者の語り時に性に過ぎる不満をぶつけた佐藤博史が被爆二世であったこと、被爆者の夫と一緒に会に参加した鶴沼礼子の役割など、長岡一人に収斂されない会の実情の一端を明らかにした意義は大きい。



司会 川口 隆行

小沢氏は触れてないが、資料調査のなかで、「私達にとつて原爆被爆とは何か」という小冊子（A4版、表紙裏表紙あわせて十六頁。表紙に一九七一年四月二四日と記載）を確認した。会員制作のスライド作品「ある原爆被災者の記録 福島菊次郎写真集「ピカドン」より」を中心とした映画上映会で配布されたと思われる。

上映会の意義（S||佐藤博史か）やスライド制作の過程を説明（中島竜美、鶴沼礼子）する文章が並ぶ中、「原爆の図」にことよせて（田中瑞枝）という文章が収められている。執筆者がどのような人物かは不明だが、「原爆の図」の成立、50年代全国巡回展、海外巡回展に言及、スライドとともに映画「原爆の図」が上映されたことも書かれている。映画は第八部まで収めているとあるので、今井正版（一九五三年）ではなく宮島義勇版（一九六七年）であろう。たまたま自主制作スライドと一緒に上映しただけなのか。それとも上映運動にあたって積極的に50年代の巡回展の記憶が想起されたのか。現時点ではこれ以上の憶測は慎みたいが、あることを改めて考えないわけではない。

先に紹介したコマストリ氏の論考では、50年代の手記集編纂を

意識すること、『この世界の片隅で』が誕生したことが強調されてきた。以前、私も『われらの詩』（一九四九年〜五三年）復刻に関わった際、会員であった深川宗俊や御庄博実らが、70年代以降、元朝鮮人徴用工支援や在韓被爆者救済に取り組み、それを評論にまとめ、詩や短歌に取り組んだことが気になった。本誌掲載の黒川伊織氏の『今堀誠二『原水爆時代』再読―一九五一年「原爆記念全国平和会議」の位置づけを中心に―』にも、やはり深川に触れ、「日本の左派が朝鮮人の運動と出会いなおしていったさまを跡づけることを、今後の課題としたい」という一文がある。50年代の経験と60・70年の経験は、いかに継承・切断しているのか。今後、具体的検討が必要だろう。

長岡弘芳については、別に議論を用意すると前述したが、蛇足ついでに少し。「読む会」が被爆者運動との協同に傾くにつれ（運動）を離脱した長岡であるが、松坂北高等学校在学中（一九四八〜五一年）、平和懇談会という共産党系の学生団体に所属、社会運動に熱心に参加していた。この時期に後に松坂市長になる詩人の梅川文男と出会う。当時梅川は共産党徳田派（主流派）に属していた（梅川と長岡の交流については、尾西康充『近代解放運動史研究―梅川文男とプロレタリア文学』和泉書院、二〇〇六年、同「梅川文男・長岡弘芳・竹内浩三―三重の反戦詩人たち」『ふびと』64号、二〇一三年に詳しい）。卒業後、五一年から五三年の間、日本レイヨン岡崎工場に勤務するが、この時期については関係者の証言はむろん本人の言及も確認できていない。わずかに『長岡弘芳詩集』（一九九五年）の遠丸立による解説に「一九五二年、二〇歳、松坂で会社勤めをしていたころから詩を書きはじめている」とい

う記述があつて、「松坂」は「岡崎」の間違いと思われるが、この頃の詩作は、詩集にも遺稿集にも載っていない。



報告 道場 親信

やや回り道をしたが、最後に道場親信氏の論考を紹介して文章を結びたい。コマストリ氏の議論が、60・70年代の歴史としての50年代を踏まえた内容であるのに対して、道場氏の議論は、60・70年代の（運動）を通して発見した思想的課題の、どちらかと言えば歴史を扱っている。道場氏は、これまで小田実について度々論じており、特に「難死」の思想と現代（『われらの小田実』藤原書店、二〇一三年）は、ベトナム反戦運動の経験と思想化について重厚な議論を展開している。本特集を企画するにあたって、すでになされた議論を踏まえつつ、小説『HIROSHIMA』（一九八一年）を論じるように、無理を承知をお願いした。テーマが拡散しすぎない限界まで議論の射程を広げることが、「戦後70年」連続企画の一環として重要と判断したからだ。

道場氏は、小田がベトナム反戦運動から見出した「難死」の思想と「被害者」加害者」連環という二つの系からなる議論を軸として、『HIROSHIMA』の読解を試みる。「難死」の絶対性と被害」加害の絶対性の緊張関係を損なうことなく、原爆という出来事の全体性を表象する戦略として、「難死」者の呪いの重層化、憑依の場の持続的な創出を指摘する。そのことと『HIROSHIMA』の文学的実験の意義があるという。そして、道場氏は、小田が何

度も『HIROSHIMA』に立ち戻り、対峙し、自己解説を繰り返すことで、自分の思想を練り上げていった点を強調する（このことよって、図らずも本特集の射程は、90年代半ば、「戦後50年」頃まで広がることになった）。

道場氏の議論にまず気づかされたのは、私を含めた狭義の「文学（研究）者」による『HIROSHIMA』論のダメさである。小説の構造、機能、機構に即した議論があまりにも不十分であった。あるいは、小田の自己解説に手玉に取られていた。道場氏は、自己解説や評論的言説を参照するが、その時期的な揺れをも丁寧に腑分けしつつ、〈運動〉としての小説〈表現〉の解明に向かおうとした（ちなみに道場氏の専門は日本社会科学史、社会運動論）。

道場氏の成果を踏まえ、今後『HIROSHIMA』を議論するにあたって重要になることを一言述べるとすれば、小田があなたの自己解説において「語らなかつた」ことは何かということ、吟味、熟考することであろう。それに関連することをやはりひとつだけ指摘しておきたい。主体の重層性という戦略によって、第一部の登場人物たちの多くが、第三部において誰かに憑依し、再現される。だが、道場氏が注7で注意深く示唆するように、朝鮮人女性・乙順は、誰にも憑依できず、その声と存在は宛先を失ったままである。そのことをどのように考えたらよいのか。無い物ねだりではない。小田の〈表現〉と〈運動〉の軌跡の意義を、現在に甦らせるために必要な問いと思うからだ。